

優秀賞

私が私であるために

国立大学法人北海道国立大学機構 帯広畜産大学
畜産学部 畜産科学課程家畜生産科学ユニット 3年 蝶田 あやの

私の実家は、福島県で酪農を営んでいます。震災後、町はゆっくりとこれまでと新しいかたちを創っていますが、町の酪農家は実家の1件のみとなっていました。幼い頃、牧場は私の遊び場で、仔牛との散歩が大好きでした。『牛は家族の一員だからね』と話してくれた祖母のことばはいつも私の心にあります。私の日常に牧場があり、牛がいました。ただ牛と触れ合うことを楽しむだけでなく、もっと牛のことを知りたい、大好きな牧場を失いたくないという思いで今、私は北海道で勉強をしています。

牛に立ってもらうにはどうしたらいいの？牛が私に乗りかかるのはなぜ？仔牛がしっぽを振るのは犬と同じように喜んでいるわけじゃないの？…子どもの頃に不思議に思っていたことの答えがあり、飼料高騰に伴う代替に地元の特産物のサツマイモの蔓が活用できないかと考えれば、教授や仲間との意見交換ができ、情報がすぐ近くにあります。牛の行動習性や体内機能など専門的な講義やフィールドでの実習など、手こずることもありますが、牛のことについて語り、一緒に学べる仲間、携わる方々との出会いは新鮮でわくわくすることばかりです。

私が北海道でやりたかったことの1つは、たくさんの酪農に出会うことです。牧場見学や実習、搾乳のアルバイトを行う中で、多くのことに気づかされました。酪農という仕事は、安心で安全な牛乳を作るために酪農家の考え方も規模も飼っている牛もさまざまであるからこそ、牛と従業員の双方が心地よく働けるよう環境を模索し、情勢を考慮しながら、持続可能な酪農へと順応していくことが醍醐味であり、大切だと思いました。

つなぎ牛舎での搾乳を行った時のことです。実家はヘリングボーンパーラーですが、つなぎの場合、タイミングを計って搾乳し、次に来る牛の搾乳準備をするなど、個々の力量と連携が求められました。つなぎ牛舎ならではの牛との近さがあり、私の動搖が伝わるかのように、私の前では急にびっくりしたり、暴れることが多く、ますます搾乳ができなくなっていました。その都度、細かく教えていただきましたが、手順通りにやっていても人より時間がかかり、丁寧にやろうとすると牛が嫌がり、酪農家にも迷惑をかけてばかりで、この仕事は向いていないのかもしれない、自分が情けなく思えてきました。『酪農家の娘でしょ』『後継者なんだからできて当たり前じゃないの』『被災地の酪農家』という言葉がいつしか自分を追い詰め、ありがたいはずの応援や期待もプレッシャーになっていました。大好きな牛、大好きな酪農なのに、将来のことも考えられなくなり、私は酪農から距離をとるようになりました。

そんな時、SNSを通して1件の実習の誘いを受けました。また実習先に迷惑をかけたら

どうしようかと不安はありましたが、牛との関わり方がとてもやさしくて、酪農教育にも熱心な女性経営者というのはとても魅力的でした。このままではいけないと葛藤していた私に自分を見つめ直す機会とまた大好きな牛や酪農に向き合うきっかけをいただきました。不安と緊張でいっぱいだった私をご家族のみなさんは温かく受け入れていただき、充実した時間を過ごさせていただきました。何より初めて前搾りを褒めていただきました。実習期間も終盤の頃です。乳房に痛みのある牛に思うような搾乳ができず、私は不覚にも悔しくて涙ぐんでしまいました。そのことに気づいてその方は、やさしく声をかけてくださいました。過去に私と同じように涙を流したこと、今も試行錯誤し続けていること、言葉ひとつひとつが心に響きました。『泣くことがあっても、牛の前では笑って、やり方はたくさんあるのだから、自分なりの別な方法を探すことを諦めないで。失敗は学びのストックとして受け入れればいいじゃない』。私は、失敗して、すぐに泣いてしまう自分が嫌いです。でも、どうしても直すことができません。ずっとそんな自分と戦って、モヤモヤした気持ちを溜め込んできました。これまでたくさんの方に励まされ、これからも見守ってくれる人がいるのだから、ひとつひとつ乗り越えていけばいいのだと思えるようになり、酪農を楽しんでいいのだと改めて思えたことが嬉しくてたまりませんでした。

私の夢は、実家の酪農を継ぐことで、それを叶えてくれるのは牛です。酪農にはたくさんの楽しいがつまっています。小さい頃は牛と遊ぶことが私にとっての楽しいでしたが、今は牛の成長を見守ることへのやりがいを楽しいと思うようになりました。愛情込めて育てた仔牛が大きくなり、良いお産をして、たくさんの乳を出し、命がつながっていくことは自分の家族のように嬉しいです。実家の牧場の課題は山積みです。ハイレベルな酪農家を目指そうとは思いませんが、祖父や父親がこれまで繋いでくれた大好きな牧場をこの先もずっと続けていくためにもひとりの酪農家として、これからも心から酪農を楽しめるようになりたいと思います。のために、私だから考えられることもあると思います。牛を飼育する環境、そしてその環境の一部としての自分や従業員が話し合いながら働きやすい職場になるよう、これからも模索していきたいです。

私が今、考えていることの1つとして、もっと多くの人に酪農を知ってもらい、牛と触れ合うことを楽しみ、牧場を笑顔あふれる場所にしたいと思っています。以前、地元の幼稚園児と小学生、その保護者を対象にしたモーモースクールにスタッフとして参加したことがあります。モーモースクールは、搾乳や子牛の散歩、バター作りが体験できるイベントです。牛を初めて見るお子さんがほとんどで、目を輝かせながら「かわいいね」「まつげ長いね、いいなあ」とお母さんと話をしながら餌をあげる子もいれば、怖がって、触りたいけど触れない子もいました。私が仔牛の頭絡を持ちながら「ここ温かいんだよー」と触って見せたりすると恐る恐る手を伸ばし、最後にはにっこり仔牛に抱きついていた姿はとても嬉しかったです。子ども達に

とてこの楽しかった体験が日常生活の中で活かされていけばと思います。また、直接子ども達の驚きや歓声が聞けたことは、酪農に取り組む私自身のやりがいにもつながりました。地域とのつながりを大切に、私は酪農家として生きていきたいです。